東京帝國大學圖書館藏

安永次男著作集

第四巻

青土社

安東次男著作集　第四巻
© 1974 Seidosha
昭和四十九年十一月二十五日印刷
昭和四十九年十二月十五日　限定一〇〇〇部発行　0390—900011—3978
定　価　三九〇〇円

著　者　安東次男
発行者　清水康雄
校訂者　神崎　忠
題　字　加藤楸邨

発行所　青土社　東京都千代田区西神田一—三—一三　山田ビル　(電)二九二—七〇七六
振替東京　192955

印刷所　大盛印刷
製本所　美成社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第四卷 目次

与謝蕪村
「澱河歌」の周辺 9
路幾筋ぞ 41
鑑賞篇Ⅰ 53
雨と成 54　瀟湘の 62　日くるゝに 68　二もとの 72
うぐひすの 80　方百里 85　若竹や 95　かきつばた 105
葛を得て 111
「春風馬堤曲」新釈 119
「北寿老仙をいたむ」のわかりにくさ 155
鑑賞篇Ⅱ 181
鮎くれて 182　牡丹散て 190　老が恋 197　橋なくて 203
夕風や 211　かなしさや 216　秋の燈や 221　花茨 227
さくら狩 236　遅き日の 242　月天心 252　雪の暮 260
君見よや 269　冬鶯 276
蕪村との出会い 287
真贋 297

文人の句　桃李の道㈠　315
碑にほとりせん　327
蕪村余瀝　339
竹溪訪隠　桃李の道㈡　345
画　俳　桃李の道㈢　351
芭蕉七部集評釈㈡　361
狂句こがらしの巻　363
月とり落すの巻　445
芭蕉七部集評釈資料　511

安東次男著作集 Ⅳ

与謝蕪村

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「澱河歌」の周辺

安永六年丁酉二月、京都の橘仙堂から板行された蕪村の春興帖『夜半楽』には、斬新な詩体をもつ一種の長詩「春風馬堤曲」につづいて、「澱河歌」と題した三首八行から成る短詩が収録されている。この「澱河歌」三首は、蕪村の制作意図がどこにあったかよくわからなかったためであろうか、それとも「馬堤曲」十八首の盛名に圧されてか、従来とかく忘れられがちであったが、「馬堤曲」ひいては蕪村芸術そのものを解く、重要な鍵となる作品であったように思われる。内容的にも、きわめて独自な発想をもつ。

「○春水浮梅花　南流菟合澱
　錦纜君勿解　急瀬舟如電
○菟水合澱水　交流如一身

舟中願同寝　長為浪花人

○君は水上の梅のごとし花水に
浮で去ること急ヵ也
妾は江頭の柳のごとし影水に
沈でしたがふことあたはず

前二首は、「春水　梅花ヲ浮ベ、南流シテ菟ハ澱に合フ。錦纜ヲ　君ヨ解クコト勿レ、急瀬ニ舟ハ電ノ如シ」、「菟水　澱水ト合フ、交流シテ一身ノ如シ。舟中　願ハクハ同ニ寝テ、長ク浪花ノ人ト為ラン」と読める。菟とは宇治川、澱とは淀川である。解は用いるまでもあるまい。わたしもできることならあなたといっしょに流れをくだって、いついつまでも浪花に住みたい、あるいは、浪花へ帰りたい、と女が男に甘えてみせるのである。川船で浪花へ戻る男を送って伏見あたりの妓楼の女が口にすることばを蕪村流に代弁してみせたとも読め、またもっと深刻な男女の仲のこととも受取れるが、いずれにせよ、ままならぬ身体と心のことをそれとなく男に伝える、女のな

まめいた台詞である。「澱河歌」は、「馬堤曲」と対をなす、あるいは反歌とも見なすべき作品であるから、もちろんここにも「馬堤曲」同様、「女に代つて意を述べ」ながら、そこに蕪村自身の懐旧の情が色濃くにじみ出ていると見てよいが、それを蕪村は、なぜわざわざ、川くだりに托して歌ったのであろう？　また、水路をえらべば当然かれの郷里毛馬の地を通ることになるのだが、その赴く先に、なぜ毛馬ならぬ浪花の地を点出してきたのか？　これは「馬堤曲」の骨組の一つを、浪花の浮華に染みきれぬ田園思慕にあると眺める者には、いささか理解しがたい。「澱河歌」を、京住二十年ようやく望郷の念にかられていたらしい蕪村の作であると考えてみても、なお合点のゆかぬところがある。蕪村には老来、京・伏見を出て浪花に発展してゆく淀川の殷賑に、何かとくべつの愛着を寄せる理由があったのではないか？

「澱河歌」三首が、『文選』に載せる魏の曹植の「七哀詩」（『玉台新詠集』では「雑詩五首」の㈠として収める）に想を得ていることは、諸家のしばしば指摘するところである。

……

君行踰十年
孤妾常独棲
君若清路塵
妾若濁水泥
浮沈各異勢
会合何時諧
願為西南風
長逝入君懐
君懐良不開
賤妾当何依

……

君が行　十年を踰え
孤妾　常に独り棲む
君は　清路の塵の若く
妾は　濁水の泥の若し
浮沈　各々勢を異にし
会合　何れの時にか諧わん
願わくは　西南の風となり
長逝して　君が懐に入らん
君が懐　良に開かずんば
賤妾　当に何れに依るべき

「清路」「濁水」に対して「蒐水」「澱水」、「塵（浮んで流れ去るもの）」「泥（沈んでとどまるもの）」に対しては「梅花」「柳影」、また「願為西南風、長逝入君懐」に対しては「交流如一身、舟中願同寝、長為浪花人」、そしてさらに「君若清路塵、妾若

濁水泥」の詩句がそのまま全体として「澱河歌」三首目の和詩に換骨奪胎されていることは、疑うべくもあるまい。」もっとも曹植のこの詩に歌われた状況は、中国の古詩にあってはかなり同工異曲の詩想を見出すことのできる一つの類型的発想であるから、あながち蕪村の作品をこれのみに結びつけて解釈することも当らない。そのうえ、「澱河歌」をよく読んでみれば、「七哀詩」とこの作品が、その対照的措辞において似通っているわりには、詩体の意のあるところはかなり隔っていることもわかるのである。その点これは、蕪村が、同じ中国の詩人でも、たとえば王維を踏えた場合などとは、質的に異るところがあった。

むしろ、蕪村の狙いの一つは、右のごとき措辞の対比にではなく、「清路塵」と「濁水泥」のかわりに「水上の梅」と「江頭の柳」を以てしたところにあった、と見てよかろうか。事実、「水上の梅」についていえば、これよりやや遅れて「水に散りて花なくなりぬ崖の梅」（一本に下五を「岸の梅」とする）の一句があるし、「江頭の柳」については、これまた「梅ちりてさびしく成し柳哉」（年代不詳だがおそらくこれも「澱河歌」成立のややあとであろう）の一句が見られる。ということは、蕪村の水上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook